

インクルーシブな農業体験を目指して ～こえどファームの取り組み～

特定非営利活動法人 土と風の舎 代表理事
特定非営利活動法人 日本園芸福祉普及協会 理事 渋谷雅史



■はじめに

NPO 法人土と風の舎は、人と自然と地域との新たな共生を基本理念のもと、園芸や農を通して、障がいや世代、立場を超え、誰もが自然と触れ合える場（場所・機会・時間）を創ることを目的に2002年に設立されました。設立当初のメンバーは、当時埼玉県が開催した彩の国・癒しの園芸活動指導者養成研修およびサポーター養成研修修了者で構成され、埼玉県内での園芸福祉の実践と普及を目指して活動が始まりました。2018年現在の会員数は正会員25名、賛助会員35名、ファミリー会員31組となっています。

現在の主な活動は、「こえどファーム」（埼玉県川越市）での農業体験、福祉施設や病院、保育園などでの訪問農園芸体験「おでかけ園芸ひろば」、農園芸による障がい者の自立・就労支援「みどりの架け橋」、園芸福祉の普及啓発および人材育成などです。

■園芸福祉とは

NPO 法人日本園芸福祉普及協会では、園芸福祉とは「仲間をつくり、草花を育てて、みんなで幸せになろうという思想・技術・運動・実践」と定義しています。同じ地域に暮らす様々な人たちが、同じ立場で参加し、植物を通じた多彩な活動を展開して、一緒に楽しみ豊かな地域社会を創りだしていくことが園芸福祉活動の目的です。園芸福祉活動の実践領域は福祉、医療、保健、教育、保育、農業、造園、環境、都市整備、地域交流、まちづくりなど社会全体ととらえています。日本園芸福祉普及協会では初級園芸福祉士および園芸福祉士

を養成し、園芸福祉の普及・啓発を図っており、当会員の中にも園芸福祉士が多数在籍し、活動の中心的な役割を担っています。

■こえどファーム

こえどファームは、子どもも大人もお年寄りも障がいのある人も介護を受けている人も外国の人でも、あらゆる人がごちゃ混ぜになりながら「農を楽しむことができること」「植物や自然と触れ合えること」をコンセプトにしている農業体験専用の農園です。JR埼京線・東武東上線川越駅からバスで約25分、江戸の面影を残す蔵造りの町並みを抜けた川越市の北西部に位置し、近くには入間川や小畦川が流れ、田畑・竹林・雑木林が点在する自然豊かな地にあります。しかもバス停から徒歩1分という恵まれた立地です。2002年の活動開始当初は20aほどの広さでしたが、現在は約80aまで広がりました。農園は徒歩10分圏内の4つのエリアに分かれており、子どもたちの発案でくりのき農場、どろんこ農場、あおぞら農場、おひさま農場と名付けられています。



【こえどファームの中心となるくりのき農場】

電気、ガス、水道は整備されていませんが、物置小屋、ガチャポン井戸、バイオトイレ、道具置き場、育苗ハウス、休憩処など参加メンバーの手作りで次第次第に整いました。こえどファームの大きな特徴は市民農園のような区割りが一切無く、農園全体がすべて共有エリアとなっており、個人での野菜づくりはしていません。定例活動日を設け共同作業、共同収穫による農業体験が行われています。現在の主な活動は以下の5つですが、それぞれが独立した活動ではなく、すべてがつながり合っているのも特徴の一つです。

- ① 畑をみんなで楽しもう！
- ② 親子で畑で遊ぼう！
- ③ アグリチャレンジ
- ④ 畑でハーブを育てよう！
- ⑤ こえどファームマーケット

参加希望者はいずれかの活動にメンバー登録することになりますが、登録された方はどの活動にも参加することができます。今年度は個人67名、親子42組、障がい者施設1団体が登録され、子どもとその親（家族）、成人、高齢者、障がい者、社会参加・社会復帰を目指す方など、様々な方が県内外から参加しています。

■畑をみんなで楽しもう！

この活動は、2002年にスタートした、すべての市民を対象にした農業体験です。毎週火・金曜日の午前10時から午後3時までが定例活動日となっています。市の公民館との共催事業として行っていることから、市内在住在勤の方は公民館へ、それ以外の方は当団体に応募することになります。参加費は年間6,000円で、今年度は新規・継続の方を合せて個人42名（男性27名、女性15名）、障がい者施設1団体がメンバー登録されています。登録メンバーには障がいのある方、介護サービスや障害福祉サービスを利用されている方なども含まれています。一日のみの体験も受け入れており、高齢者施設や精神科の患者さん、社会参加や社会復帰を目指す方が民生委員や保護観察官などと一緒に参加されたこともあります。

参加者は朝10時にくりのき農場に集合します。一日の流れは次の通りです。

- 10:00 ミーティング その日の作業内容を共有
- 10:10 作業ごとにグループに分かれて作業開始
- 12:00 昼食
- 12:45 午後の作業開始
- 14:15 作業終了
- 14:20 作業報告 作業結果を共有
- 14:30 全員で収穫&分配
- 15:00 解散



【共に鍬を振り、共に種を蒔き、共に実りを喜ぶ】

毎回、30名ほどが参加されるので、必ずその日の作業内容を全員で共有した後、作業に取りかかり、一日の作業終了後には作業結果を確認し合います。そして、その日の収穫物は参加者全員で収穫し、等分して持ち帰ります。販売を目的にした農業生産活動は行っていませんので、たくさん獲れた時などは、福祉施設へ食材や加工品の原材料として提供しています。

栽培品目は半年ごとに参加メンバーで決めます。年間約60種類の野菜とその他にぶどうやブルーベリーなどの果樹、小麦や大豆などの穀物、山菜、きのこ、ハーブ、ヒマワリやパンジーなどの草花など実に多彩です。乳幼児や高齢者、化学物質過敏症の方なども参加されているので農薬や化学肥料は使っていません。その分、手入れはなかなかの重労働ですが、一人では大変なことも協力して楽しみながら作業することで、笑顔と笑い声がいっぱい溢れています。また、天候や病害虫が原因で思うように育たないことがしばしばあっても、栽培技術に関して専門家から直接指導を受けること

はなく、参加者同士で知恵を絞って解決策を導き出します。

年間行事としては、旬を食べる会（4回）、勉強会（4回）、講演会、市民農園視察見学会、伝承料理教室、味噌づくり、親睦会などを開催しています。冬期には隣接する竹林整備も行っていて、近隣の宅地化が進み現在は行っていませんが、かつては整備した竹林の竹を使って炭焼きもしていました。

農作業で出る残滓や剪定屑は、農園外へ持ち出さずに堆肥化に取り組んでいます。また、学校給食の残菜や街路樹の剪定枝葉からできた堆肥を利用するなど、環境保全活動にもつなげています。

参加メンバーには家庭菜園をされていたり、市民農園を長年利用されている方もおり、経験豊富な方から未経験の方まで様々ですが、先輩・後輩、先生・生徒などといった序列的な関係は一切なく参加者同士が同じ立場で共に学び合い、助け合い、支え合うイコールパートナーの関係が築かれています。また、『この農園は誰が管理されているのですか？』と、よく質問を受けますが、ここでは管理者という概念はありません。除草や耕耘などの管理作業はいつでも誰でも行えるように活動日以外も農園は開放され、水やりは当番制で行うなど参加メンバー全員がその役割を担っています。

このように共同作業、共同収穫を通して、地域の様々な人が集い、出会い、つながり合えるのがこの農業体験の何よりの特色なのです。

■親子で畑で遊ぼう！

毎月1回、土曜日10時～14時には親子を中心とした農業体験「親子で畑で遊ぼう！」が開かれています。子育て支援を行うNPOと連携して、小さな赤ちゃんから就学前までの子どもたちが親子で農業を体験しながら身近な自然と触れ合い、子どもと親の関わり合いや子ども同士親同士の交流の場として、2006年に始まりました。当初は1～3歳の乳幼児と母親が中心でしたが、現在は8歳までの子どもとその親、加えて祖父母、親類も参加されています。この活動も公民館との共催事

業として行っていて、障がいがあっても病気があっても、親子・家族なら参加でき、今年度は新規・継続を合わせて42組がメンバー登録されています。年度途中や一回ごとの参加は受付けておらず、参加費は1家族あたり年間6,000円です。

この活動で、土起こし、堆肥・肥料散布、耕耘、畝作り、種まき、植付け、草取り、間引き、芽かき、誘引、害虫退治など「学ぶより感じる」を大切にしながら野菜づくりのすべての作業を体験します。夏には収穫したてのスイカでスイカ割り、秋にはこえどファームのすべてのメンバーが揃って行う収穫祭、冬には麦踏みやシイタケの駒打ちなどもします。そのほか、収穫物での料理、もちつき、焼きいも、昆虫飼育、自然観察、園芸クラフト、ネイチャーゲーム、焚き火、大工仕事など様々な体験が年間を通して待っています。

活動日当日は「畑をみんなで楽しもう！」のメンバーのほかに保育士、栄養士、教員、看護師、園芸福祉士、グリーンアドバイザーなどの資格を持つ当会員もスタッフとして加わり、様々な面から活動をサポートしています。日常の管理作業の中心的役割はこれらのメンバーが担っていますが、生長を観察したり、草取りや水やりがいつでも親子で出来るように、一定のルールのもと農園を開放しています。

みんなで一緒に土を耕し種を蒔く。草取りをして実りを味わう。虫を追いかけ草あそびをする。これらの体験が子どもの豊かな感性を育み、親子のコミュニケーションを深めます。子ども同士、親同士、地域を超えた人同士のつながりが生れるかけがえのない農業体験なのです。



【親子でダイコンの種まきを楽しむ】

■アグリチャレンジ

精神障がいや発達障がいのある人の自立や社会参加、就労を支援する農業実習プログラム「アグリチャレンジ」は、2012年より実施しています。毎週金曜日の10時～15時が実習日で、このプログラムの目的は大きく二つあります。

一つは精神科リハビリテーションとして、精神的な病気の症状で生じる「生活のしづらさ」を改善し、安定した生活が送れるよう手助けすることです。精神障がいのある人が自立や社会参加する上で必要な能力や技能、習慣を身につけるために農作業に取り組みます。実習プログラムに毎回参加することで生活リズムを整え継続力を育みます。農作業による全身運動が運動機能を向上させ、体力や持久力を培います。集団作業が社会性や協調性を養います。小さな成功体験の積み重ねが自信となり、生きる活力となります。精神障がいのある人にとって農作業は心身の賦活にかかせないものです。



【メンバーによる苗の植付け指導】

もう一つの目的は精神障がいや発達障がいのある人への就労支援です。職業訓練として農業実習に取り組んでいます。農業の知識や技術を習得し農業分野で働きたい人、一般就労を目指し就業生活に必要な知識や技能、体力を身につけたい人など目的は人それぞれですが、個人個人の目的に沿ったプログラムをつくり、実習を行っています。農業指導は障がい者への指導経験のある会員が中心となり、「畑をみんなで楽しもう！」のメンバーが加わって行います。労働意欲、体力、持続力、対応力、作業遂行力、自己管理能力、対人関係力、

社会性など基本的労働習慣や社会生活力を身につけ、長い方で3年、短い方で3ヶ月の実習の後、就職・就農を果たしています。これらの成果を基に「精神障がい者のための訓練モデルカリキュラム～農園芸による精神障がい者のための効果的な訓練の実施にむけて～」 「農業における障がい者就労支援のためのガイドブック（精神障がい者・発達障がい者編）」を取りまとめました。

■おわりに

こえどファームの農業体験は参加者ひとり一人の特徴、病状、症状等に応じた合理的配慮のもと障がいがあっても介護を受けていてもどんな方でも同じ立場で共に農を体験できるインクルーシブな農業体験です。福祉、医療、保健、教育、保育、食、環境などに携わる様々な方々と連携しながら、子ども、子育て世代、シニア世代、高齢者、障がい者、外国人などがごちゃ混ぜになってお互いを理解し合い、お互いを認め合い、お互いに関わり合いを持つきっかけとなる場所であり、機会であり、時間であると言えます。

こえどファームは地域に暮らす様々な人々を結びつける地域コミュニティとしての役割を持ち地域福祉の一端を担っていると言っても過言ではありません。しかしながら、地域の課題解決の手段の一つではありません。進士五十八先生の言葉を借りるなら、「〇〇のためという手段ではなく、畑仕事が好きだから、楽しいから、仲間がいてうれしいから、だからこえどファームのメンバーになってみよう！」ということそのものが、私たちこえどファームの農業体験の本質だと思っています。

土を耕すことは、心を耕すこと
心を耕すことは、人を耕すこと
人を耕すことは、地域を耕すこと
地域を耕すことは、社会を耕すこと

この言葉を胸に、今後も様々な人々と共にインクルーシブな農業体験に取り組んでいきたいと思っています。